ぬるむ水 海鳥受難 北海道・天売島

北海道の日本海に、周囲12キロの天売島が浮かぶ。島の西側は8種類およそ100万羽の海鳥が繁殖する断崖が続き、反対側の海岸に漁業や観光で生計を立てる270人が住む。

海鳥の多くの種は、食べるのも眠るのも海だ。とはいえ、卵を温め、ヒナを育てる繁殖のときだけ、陸が欠かせない。こうした最も重要な場所を天売島は担っているのだ。

私は、この島の住人となり40年がたつ。この間、700人の人口が3分の1近くに減った。海の資源にも激変が起きた。夏の主要漁獲物だった最高級エゾバフンウニが、暖かさに強いキタムラサキウニに取って代わられた。1990年ごろを境に、真夏の海水温が軽々と20度を上回るようになって起きた現象だ。

さらに、天売島を世界最大の繁殖地とする、40万ペアのウトウを苦難が襲いはじめた。脂肪分が高くヒナの成長に理想的なイカナゴが激減し、子育てがうまくいかなくなり始めたのだ。

40年前、島のイカナゴ漁は水揚げ1億円の絶頂期を迎えていた。数十万羽の海鳥のヒナがかえる5月、海鳥に都合よくイカナゴが近海に大発生した。ところが、誰も予想しない水揚げの急落が起こり、漁をする人が途絶えて15年になる。ウトウはイカナゴをずっとヒナに運び続けたが、近年はイカナゴが海に皆無という年もあるのだ。

この夏、ヒナにイカナゴを持ち帰るウトウがほぼ見られなかった。代わりにイカやホッケの幼魚を運んだが、ヒナの栄養不足は深刻となる。巣立ちを迎える7月までに、ふ化した数十万のヒナの7割超が餓えで倒れた。同様のシーズンが、ここ10年で4回を数える。

世界的に希少なケイマフリも、イカナゴをヒナに与えて子育てするが、今年はカジカやカレイを運ぶ姿が目立った。7月末には、未熟なまま沖へ泳いで巣立っていく若鳥を観察した。

天売島近海に、夏から秋までブリが押し寄せるようになった。海水温の上昇が、海の生き物の動きを次々と変えている。海鳥たちの暮らしぶりは、海の環境や私たちの未来を映す鏡。海鳥の声から、私たちは何かを聞き取ることができるだろうか。

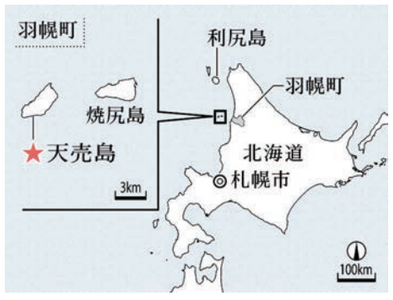
写真・文 寺沢孝毅

（自然写真家・https://www.terra-images.jp）

（天売島及び近海で撮影）

ほぼ全身に綿羽が残り、親に比べて小さい体で沖へ向かって泳ぐケイマフリの巣立ちビナ。潜ることはできるが飛ぶことはできない。これほど未熟なヒナの巣立ちは見たことがない＝7月

ウミガラス、ケイマフリ、ウトウなどが集団繁殖する天売島は、世界でも貴重な海鳥繁殖地。キツネなど絕対的捕食者がいない安全性、ヒナを育てるのに必要な海の豊かさ、集団で繁殖できる大きな断崖の存在などが海鳥が選んだ理由だ＝2020年7月（ドローン使用）



天売島近海に、早ければ6月に対馬暖流に乗って回遊してくるブリ。魚群が水面へと追い込んだ小魚などをウミネコが食べようと集まってきた。ブリの群れはさらにオホーツク海へと回遊していく＝2018年8月（ドローン使用）

日没が迫るころ海で過ごしていたウトウが天売島沿岸に集まり、帰巣が一気に始まる。沖合から湧き出るように迫り来て、けたたましい羽音を響かせる。展望台で観察する人をかすめて次々地面へ飛び込んでゆく。晴れた日には利尻島（奥）のシルエットが美しい＝2018年7月

イカをくわえるウトウ。ウトウは両翼を羽ばたいて巧みな潜水をして、ヒナに届ける栄養豊富な魚を選んで捕らえる。土の斜面に掘った巣穴の奥に1卵を産んでヒナを育てる。昼間は海で過ごし、日没後から夜間にかけて巣に戻る＝6月

およそ100万羽の海鳥繁殖地がある崖下に繁殖の終盤を迎えたウトウが浮かび、ウニ漁をする漁師が磯舟を浮かべる。海鳥も住人も、海の豊かさに支えられて生きている＝7月

もっと知りたい

脂肪分が多く栄養価が高いイカナゴをくわえ、育ち盛りのヒナのもとへ飛び立つケイマフリ。絶壁の岩の隙間（すきま）の奥に5月ごろ普通2卵を産んで、6～7月にヒナを育てる＝6月